

日本臨床漢方医学会 第16回講演会

「頑固な咳と漢方」

織部内科クリニック 織部 和宏

平成25年6月1日 城山観光ホテル

最近、流行性耳下腺炎、俗称・おたふく風邪が大分市内で流行っている。孫が2人とも立て続けに罹患したが、将来男性不妊の原因になる Testitis にはならず、ホッとしている。

【症例1】 62才 女性

4週前、孫(6才)がムンプスに罹患、2週後その母(34才)に感染した。同居していたためか今週に入り、自分も「両耳下腺が腫れた」と言って来院した。

脈浮やや数、顔は赤く上気し、体は熱感が強く背中のみ少し寒いと言う。口も乾く。体温37.8℃

以上より桂麻各半湯合桔梗石膏を処方した。

経過（症例1）

当日の検査では、血清アミラーゼ：300 IU/l(<111)と上昇し、ムンプスウイルスHI：16倍(<8)白血球数：3700（単球12.2%↑）CRP：0.17であった。

4日後に来院。

漢方薬服用後は、みるみる耳下腺の腫脹が軽減し、熱はすぐ下がった。

その後に念の為、**柴胡桂枝湯合桔梗石膏** 4日分で、完治した。

經過 (症例1)

初診時



再診時



【症例2】 80才 男性

2年前の4月14日、外出して冷えた。その夜より寒気。咳、喉痛、発熱、更に全身がピリピリすると言って翌日来院した。 脈浮やや数、血圧166/72

桂麻各半湯をエキスで処方した。翌日には悪寒、全身のピリピリは治まり、咳も軽減した。

投薬のポイントとなったのは、傷寒論条文中の「其の少しく汗出づるを得る能わざるを以って身必ず痒し」の所である。

全身のピリピリ他、蕁麻疹等に結構応用している。

頑固な咳と漢方療法

以前山友会で、漢方で高名な足立秀樹先生が炙甘草湯を御発表されていたが、

- i 肺中冷
- ii 脾気虚
- iii 腎虚
- iv 非定型好酸菌感染症

について、発表させていただく事にする。

i 肺中冷

【症例3】 33才 女性

主訴は1ヶ月以上続く咳

平成×年1月10日、外出して凄く冷えた。

鼻水、頭痛等は売薬で止まったが、その後1ヶ月以上乾燥咳嗽が続くと言って、2月13日に来院した。

元来より冷え症で尿が薄くて近く、量も多い。

身長:157cm 体重:50kg 脈沈細 血圧:112/78

手足は冷えが強く、腹診で心下痞鞭と按じて冷たく感じられた。

經過 (症例3)



経過（症例3）

肺中冷と考えた。

原文では「涎沫を吐しても欬せざる者」となっているものの、過去の経験より欬は出る事が結構あるので甘草乾姜湯の方意と心下痞鞭よりエキスで人参湯 7.5g分3を処方した。

2日後来院。咳と冷えが10分の3となった。2週後に咳は全く無くなり、次は手足の冷えの改善を希望したため、当帰芍薬散に変更している。

肺中冷については、

『金匱要略』肺痿、肺癰、欬嗽上気病篇に

「肺痿、涎沫を吐して欬せざる者はその人渴せず、必ず遺尿し、小便数なり。～略～これを肺中冷となす。必ず眩し涎唾多し。甘草乾姜湯を以って之を温む。」とある。

『傷寒論』では、

「厥し咽中乾き、煩躁吐逆する者」に使用する事になっている。

今回、**人参湯**を**甘草乾姜湯**の代用として使用した。

人参湯は、加味法を含めると非常に多面的な使用ができる方剤であり、数々の他剤との合方でも使われる大変重宝する方剤である。

尚、本例との鑑別には**苓甘姜味辛夏仁湯**がある。
手足の冷えの状況、心下痞鞭の有無、痰の量の多少等で鑑別している。

ii 脾気虚が基本の長引く咳

【症例4】 75才 女性

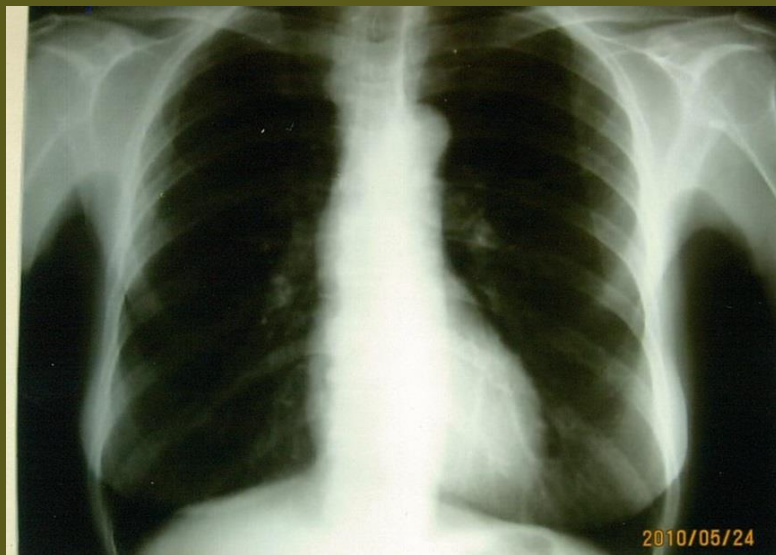
× 年4月初め、原因はハッキリしないが 嘔吐、下痢が続き、口が苦く、食物が食べられなくなった。体力が弱ったせいか感冒を繰り返し、どんどん痩せ、この2週間は咳が出だし、改善しないと言って5月24日来院した。

食欲が全く無い。何とか食べても胃がもたれ、体がだるいと言う。

現症

身長:153cm 体重:38kg 脈沈細 舌苔あり 血圧:134/80
腹診で腹力弱く、山田流で胃底は臍下4横指、心下痞鞭、胃内停水を認めた。

舌診、腹診所見及び胸部X-p (症例4)



経過（症例4）

脾、肺気虚と考え、**六君子湯**加三味（六君子湯加乾姜、五味子、細辛）の方意で、エキスで**六君子湯**合**苓甘姜味辛夏仁湯**を 3.5gずつ分3 で処方した。

5日後来院。食欲が少しずつ出て食べられはじめた。咳、痰は殆ど出ない。更に2週分の投与で気管支炎症状は全くなし。

その後、**六君子湯**のみ服用させ、半年後には、体重が45kgとなり廃薬とした。

近影（症例4）

半年後には肉付きが良くなり、元気に卓球を楽しんでいる。



六君子湯加三味(加乾姜、細辛、五味子)(加木香、厚朴、香附子＝心衰弱傾向)

浅田宗伯 勿誤藥室「方函」「口訣」より

※陳念祖曰く、喘を治す神劑なり。

※加味六君子湯(方読便覧) 肺脾虚寒、痰喘気喘するを治す。

要するに**六君子湯証**の人が咳・痰喘を併発して長びく時に使用する訳である。

煎じの時に杏仁を加えると、更にパワーアップする。

エキスの場合は、**合苓甘姜味辛夏仁湯**で十分代用できる。

五行論では肺の母は脾であるので、長引く呼吸器疾患で虚証の場合は、脾から治療するのは基本テクニックの一つである。

iii 腎虚 即ち 腎性の咳嗽

『黄帝内经』素問 咳論篇に、

「黄帝問曰、肺之令人咳、何也。岐伯対曰、五臓六府皆令人咳。非独肺也。～略～ 腎咳之状、咳則腰背相引而痛、甚則咳涎。」とある。

この事は、老人性の頑固な咳を治療する際に「金匱要略」の「肺痿、肺癰、欬嗽上気病」篇や「痰飲欬嗽病」篇の方剤で効果が不十分だった場合に、二の手、三の手として頭の中に入れておくとうるなケースである。

最近、西洋医学的にも注目されているのが‘逆流性食道炎’による咳嗽、‘潜在性心不全’や‘肺性心’によるものなどがあり、証にあった漢方薬投与で改善する事が多い。

腎性咳嗽とみるポイントは

- ① 高齢者
- ② 深呼吸しにくい
- ③ 咳をすると腰にひびいたり、失禁する事がある。
- ④ 一般的な腎虚の症状が見られる。

治療として八味丸料を基本に随伴する寒熱症状により
六味丸料、牛車腎気丸料を弁別する。

単独でも結構効果はあるが、いまひとつの場合、麦門冬湯、
苓甘姜味辛夏仁湯などを合方すると更に良い様である。

【症例5】 85才 女性

主訴は数年前より続く慢性の咳嗽で、国立大分病院の呼吸器科で気管支拡張症、気管支喘息と診断された。

毎日ホクナリンテープを貼り、メジコン、テオスロー、シュクレアを服用しているが全く効果がないと言って、×年10月20日に来院した。

口が乾く、腰と膝が悪い。咳をすると腰にひびく、息が深く吸えない。

現症（症例5）

身長156cm 体重56kg 血圧120/80mmHg

栄養状態は良好、腹力中等度だが小腹不仁を認めた。



経過（症例5）

西洋薬の効果が無い事より腎性咳嗽がベースにあると考えた。

そこで煎じ薬で**八味地黄丸料**加麦門冬、五味子、人參、杏仁を処方した。2週後、夜の咳は殆ど出ない。

1ヵ月後、咳は殆ど出ない。腰や足のだるさも改善した。

3ヵ月後、今度は膝を治してくれと言うので、前方に**防己黄耆湯**を追加した所、1ヶ月後にはそちらも良いと言う。

その後、半年服用させて全て良いと言うので、廃薬とした。

結論

「**五臓六腑皆咳をなす ひとり肺のみにあらず**」である。

iv 肺の非定型抗酸菌症に対する漢方治療の試み

当院の患者は、結核専門病院で既に検査と治療を受けているが、他覚所見はともかく自覚症状としての食欲不振、息切れ、全身倦怠感、咳、痰、時に血痰等が改善しないケースばかりである。

一般的には男性に多いと言われているが、当院は女性ばかりで、現在6人が治療中である。

随証的に方剤を選択しているつもりだったが、なぜか全員が煎じ薬で**滋陰至宝湯**合**四君子湯**である。

ただし、間質性肺炎や肺繊維症による慢性咳嗽に対しては肺、腎陰虚の場合が結構あり、その際は**滋陰降火湯**合**六味丸料**がよく効いている。

【症例6】 80才 女性

主訴 持続する咳

5年前より咳が出始めた。専門病院を受診した所、非定型抗酸菌症と診断された。

現在まで RFP 3C、INH(100) 4T、クラリス(200) 4T を継続服用している。

しかし、体がきつくなり、咳は全然良くならないと言って、平成23年3月12日に当院を受診した。

現症（症例6）

痩せ型で身長：148cm 体重：39.6kg 血圧：140/80

脈沈細 舌診は紅舌、やや胖、微乾白黄苔

聴診で肺野にう音、腹診では腹力やや弱で右に軽い
胸脇苦満、臍傍～臍上に動悸を触知。

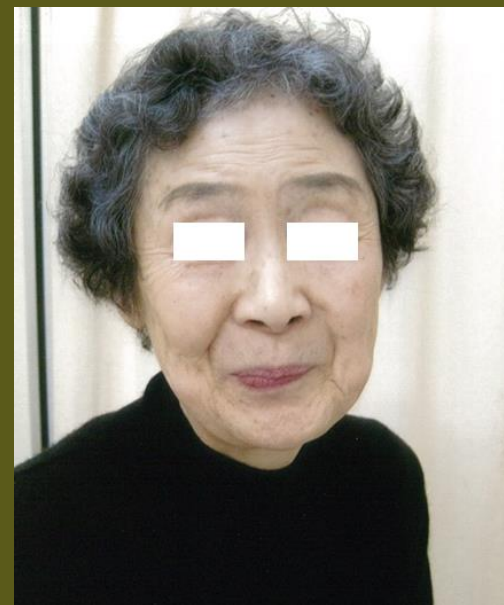
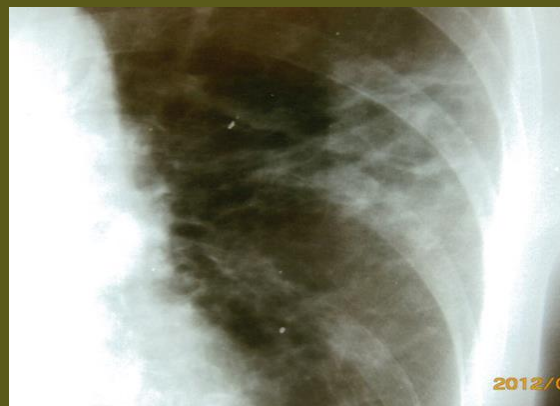
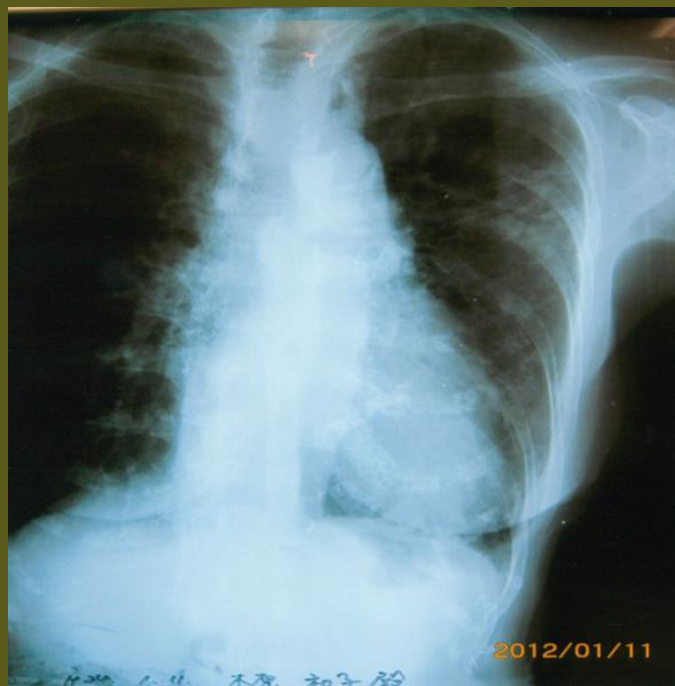
右下腹に瘀血と思われる軽度の圧痛。



腹診所見と症状より、煎じ薬で**滋陰至宝湯合四君子湯**を処方した。

2週後來院し、咳は少し楽になり、体力も回復しつつあり、
月を追うごとに元気を回復し、咳、痰もほぼ消失した。
3ヵ月後は、漢方だけの服用となり、現在に至る。

<最近の胸部X-p および 本人の近影>



滋陰至宝湯の出典は『万病回春』で、巻の六、虚劳(婦人科)篇に虚劳熱嗽汗ある者に逍遙散の次に出てくる方剤である。

「婦人諸虚百損、五劳七傷、経脈調わず、肢体羸瘦するを治す」「此の薬は専ら経水を調え、血脈を滋し、虚劳を補い、元気を扶け脾胃を健やかにし、心肺を養い、咽喉を潤し、頭目を清くし、心慌を定め、神魄を安んじ、潮熱を退け、骨蒸を除き、喘咳を止め、痰涎を化し、盗汗を収め、泄瀉を住め、うつ気を開き、腹痛を療し、胸隔を利し、煩渴を解し、寒熱を散じ、体疼を祛る。」

また、このタイプで汗無き者には、**茯苓補心湯**を使用することもある。

香月牛山の『牛山方考』は、後世派の漢方薬を使用する際には、大変参考になる書物である。

これに逍遙散の加味方として「婦人諸虚百損、五労七傷、月経不調、形体羸瘦、潮熱労咳、骨蒸の症に」逍遙散に「陳皮、貝母、莎草、地骨皮、知母、麦門冬」を加え、**滋陰至宝湯**と名付く。「男婦共に虚労咳嗽、発熱、自汗、盗汗等の症を治するの妙剤也」とそのポイントが述べられている。

山田光胤先生の口訣

加味逍遙散タイプの人が、咳の続く時に用いる。
腹証も加味逍遙散と同じである。

「かぜ」

「陰病その他について」

「かぜ」と一言で言うと簡単なようだが、よく言われる「万病のもと」で、色々な病態もあり、その対応はそう簡単な事ではない。

漢方では「かぜ」に対して全身症状の強い重篤なものを「傷寒」、軽いものを「中風」と考え、証に従って治療するのが原則と思われる。

そのためには病位・病期・病勢の正確な判定と適確な処方が必要な事は言うまでもない。

今回は「陰病」だけでなく、その他の特殊なケースと誤治例に対する症例を含めて報告する。

【症例1】 33才 女性

主訴：ノドのイガつき、体のきつさ

病歴

- (1) 前日より悪寒、発熱、頭痛、全身の関節痛、咽頭痛、軽度の咳嗽あり。平成×年8月17日当院を受診。上半身、顔がホテって熱い、顔色もやや赤く、脈浮やや弱、咽頭発赤あり、体温37.6℃ 太陽病、虚実間と診断。桂麻各半湯エキスを投与し、3日間で治癒。
- (2) 昨日より喉のイガイガ、水溶性鼻汁、軽い咳、体が寒く、きつくて横になっていたと言い青ざめた顔で、平成×年10月14日来院した。脈沈細、体温37.4度、咽頭発赤あり、直中の少陰とみて麻黄附子細辛湯エキス3日分を投与して治癒。

(症例1)

前回：陽証のかぜ 顔色赤く熱感、脈浮

今回：陰証のかぜ 顔色青白く体が寒い、脈沈細、横臥したい

〔コメント〕

陽証でも太陽、少陽、陽明のどこに位置づけられるのか、
虚実はどうかの判定

陰証でも太陰、少陰、厥陰のどの位置か、表証は併発しているのか

【症例2】 46才 女性

病歴

- (1) 4～5日前に悪寒、発熱、頭痛あり。現在は咳、白～黄色痰、少しゼロゼロ言い、口渇あり。平成×年3月29日受診。熱感があり、上半身発汗を認め、脈やや沈弦。聴診で喘鳴を聞く。腹力中程度。以上より、少陽の喘とみて、**五虎湯**エキスを投与し、4日以内に治癒した。
- (2) 昨昼より悪寒、頭痛、咽頭痛、鼻水が出、「体がだるい。気力がない」と言って、平成×年10月14日来院。顔色が青白くなり、37.8℃の熱の割に熱感なし。脈沈細より直中の少陰とみて**麻黄附子細辛湯**エキス投与し2日分で治癒。

「かぜ」の場合、一見実証様の人が当初に必ずしも麻黄湯や葛根湯証になるわけでもない。

また、虚寒の体質の人が麻黄附子細辛湯証や真武湯証になるとは限らない。

同じ人が季節や外邪の強弱、性質、そしてその時々体調によって、その場にあらわれる生体反応は様々である。

そのため、常に現在あらわしている証を的確に把握して処方を選ぶ必要がある。

かぜの漢方治療に際しては、ただ薬剤を処方するだけでなく、傷寒論の桂枝湯の条文に出ている如く、後の温覆を含め食事への細かい指導が大変重要なポイントとなる。

しかし、次の例のような人は本当に困る。

【症例3】 40才 男性

平成×年12月始め、朝より寒気がして、発熱・頭痛・肩こり、鼻水があると来院。脈浮実、無汗であり葛根湯証と思われた。

すると患者が「夜は宴会で遅くまで飲む」と言う。「漢方は暖かくして寝ていないと効かない」と言ったら、「あらゆる条件に対応して的確な薬を処方するのが医者勤めやろうが」と言い返された。

気の弱い私はそんなものかと思い、たぶん太陽＋少陰の併病になると予想し 葛根加朮附湯を3日分処方した。

3日後に来院し「あの薬はよく効いた」との事。

開業医は、食べていくためには本当に苦労させられる。

【症例4】 37才 女性

元々冷え性の人であるがクーラーにあたって更に冷えたのか、2週間前より水鼻だったが、昨日より熱が出て腹が痛くなり、下痢をしたらと言って平成×年7月31日来院した。

青白い顔色、やせ型、脈沈微細で腹力弱く臍前後の腹直筋がややスパスティックで軽度の圧痛、振水音あり。少陰とみて**真武湯**エキスを投与した。翌日より熱は下がり、2日目には腹痛、下痢はなくなった。8月2日、鼻水と頭痛がすると言う。脈は浮弱であったので**桂枝湯**エキスを投与した。3日分で治癒。

〔コメント〕

併病であったのだろうか。先急後緩と言って良いのだろうか。

【症例5】 39才 女性

主 訴:喘鳴、白色痰、体の冷え

現病歴:

1週間前にインフルエンザに罹患、近医でタミフルを処方され、瞬く間に熱も下がり、節々の痛みも無くなった。

しかし、2日前より咳が激しく出るようになり、喘鳴し、白色痰が多く出て体がすごく冷えるようになった。水溶性の鼻汁も出ると言って、平成×年2月9日当院を受診。

現症並びに経過:

色白で寒そうな顔ぼう、脈沈細、血圧102/70、太陰～少陰とみて**苓甘姜味辛夏仁湯加附子**を処方した。

3日以内に諸症状は軽減し、5日目には治癒した。

【症例6】 50才 女性

元来から胃腸の弱い人である。3日前より頭痛、項背の凝り、寒気があり腹鳴と数回の水様性の下痢があると言って、平成×年5月26日に来院した。

腹証で腹力やや弱、両側の腹直筋が臍の前後で緊張し軽度の圧痛あり、振水音を聞く事より、太陰なら桂枝加芍薬湯、少陰なら真武湯あるいは頭痛もあるので、桂枝人参湯の鑑別と思われた。

ところが脈は浮であったので、「太陰病、脈浮」より桂枝湯エキスを処方した。2日間で諸症状すべて改善。

〔コメント〕

脈診も結構大事である

【症例7】 27才 女性

平成×年11月25日に初診した患者。10月から週末になると38℃の発熱が出て多関節痛を伴った。その後3日に1回は熱発するので売薬を服用したが、11月は37.5℃位の熱が持続するようになり、喉痛で受診したとの事。

冷え性が強く、生理は8月より無いと言う。

やせ型で青白い顔ぼう、脈沈遅微細、血圧：96/60

腹力弱く、心下は腹診にて冷たく感じられた。

附子理中湯エキスを投与したところ、服用3日目頃より熱が出なくなり食欲も出るようになった。以後継服し、半年して諸症状がなくなり廃薬した。

〔コメント〕 裏寒外熱と言って良いのだろうか

発熱を主訴とした症例で、一見「かぜ」のように思われたが…

【症例8】 42才 男性 主訴：発熱、腰や膝の関節痛

現病歴：昨日サッカーの試合で寒い中を走り回り、汗を沢山かいた。その後「控え」に回り観戦して帰宅した所、夕食前より急に発熱し、全身の関節特に「腰と膝」が激しく痛み出し、平成×年1月12日来院した。

現症と経過：体温：38.3℃、血圧：120/70、体格栄養状態良好、脈やや浮実、腹力中程度。

「病者一身尽く疼み、発熱日晡所劇しき者は『風湿』と名づく。この病、汗出て風にあたり、或は久しく冷を取るに傷れ致す所なり」で麻杏薏甘湯エキスを投与した。
翌日諸症状が軽減し、3日分で治癒した。

〔コメント〕「傷寒、金匱は、嘘つきまへんなあ」

【症例9】 47才 男性

高血圧で近医で加療中の方であるが、私の飲み友達の一人である。

平成×年12月、仕事の忙しさと宴会続きで、いささか疲労気味であったが、12月18日、急に発熱し頭が痛くなり「かぜ」と思い、バファリン2錠を服用した。

大量発汗して熱は下がったが急に胸苦しくなり、じっと寝ていられなくなった。

気持ちが不安で落ち着かないと言い、12月19日午前3時、「先生、なんとかして下さい」と電話があった。

「何時と思っとるんや、胸がしめつけられるんか、心臓やったら大変やな、すぐ来い」と言ったら、30分後に不安そうな顔をして来院した。心電図は、異常なし。

「発汗吐下の後、虚煩にして眠を得ず、若し劇しき者は必ず反覆転倒し、心中懊懣す」より**梔子鼓湯**と思われた。

夜で調剤薬局が閉局につき、エキスの**梔子柏皮湯**を処方した。

3日後に夜のスナックで偶然再会した。「先生、あの薬一服で気分が良くなり、二服で完全に胸苦しいのと不安がとれた」との事。「それでもう酒飲んでまわっとるんかい、ええかげんにせんか！」

〔コメント〕

梔子柏皮湯は、梔子鼓湯の代用として使えるのだろうか。

【症例10】 55才 男性

主 訴：一週間以上つづく、特に夜ひどくなる咳

現病歴：

平成×年12月インフルエンザに罹患、高熱、頭痛、全身の関節痛、咳があり近医を受診。

タミフルにて2日以内に解熱し、頭痛・多関節痛は、消失したが、食欲がなく微熱と咳嗽が持続し、近医の西洋薬で改善せず、特に夜に咳が激しく睡眠がとれなくなり、第15病日目に当院を受診した。

現病および経過：

血圧：132/80

やや疲れた顔貌、体格栄養状態：中等度。

舌診：やや紅舌、胖、白滑苔。 脈：沈弦細。

腹診：腹力中等度で右に胸脇苦満。

以上より、少陽の虚実間とみて竹茹温胆湯エキスを処方した。

5日以内に諸症状改善し、食欲も出、よく眠れるようになり10日分で廃薬した。

「かぜ」であろうと何であろうと、よく脈証を見て証に随って治せば良い。

ただし「言うは易く、行うは難し」と痛感している。